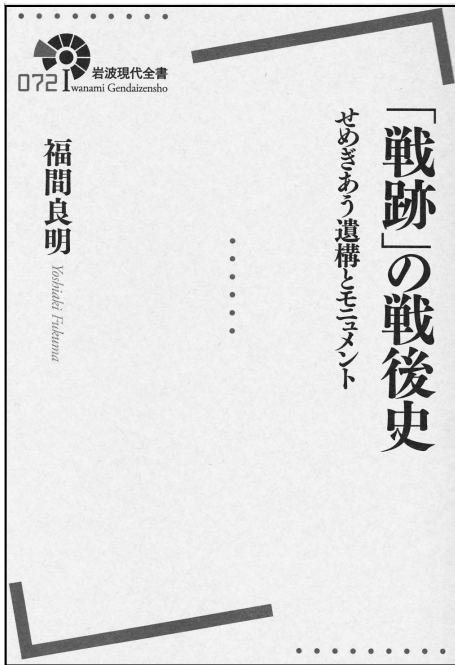


福間良明著 『「戦跡」の戦後史』

四 條 知 恵



本書は、広島平和記念公園・原爆ドーム、沖縄摩文仁丘の平和祈念公園、知覧の特攻平和会館周辺を「戦跡」として取り上げ、戦跡整備に関わる公文書や関連団体機関誌、新聞・雑誌等の資料から、「戦後日本における主要戦跡の成立プロセスを検証し、それを地域間で比較対照すること」で、「戦跡が構築される社会的な力学や、そこに浮かび上がる戦争の記憶のポリティクスを描いていく」ことを意図している。複数の広大なフィールドを対象として、新聞を中心に、公文書や機関誌などの膨大な資料を駆使して「戦跡」の成立過程を提示する著者の調査能力には脱帽する。筆者のフィールドは広島、長崎であるが、広島を含め、沖縄、知覧の各戦跡の成り立ちに、新たに学ぶところが多かった。「戦跡」は、戦争の記憶と表象研究の見地からも、興味の尽きない対象である。

そもそも、「戦跡」とは何であろうか。広辞苑の戦跡の項を繙くと、「戦闘のあった跡」というごく簡単な記載となっている。本書の文中では「戦跡」に関して明確な定義はなされていないが、

読み進めると、著者は、例えば広島において、博物館（広島平和記念資料館）、資料（遺品など）、公園（広島平和記念公園）、慰霊碑や記念碑、原爆供養塔などの墓に類するもの、そして遺構（原爆ドーム）などの様々な原爆被害の記憶を表象する媒体を包含するものとして「戦跡」という概念を使用していることが伺える。

そして、「戦跡」をメディアとして捉えた上で、その機能を次のように説明している。まず、不特定多数の来訪者に開かれているということ、次に、しばしば実物・遺物、つまり複製だけでなく時に「現物」を来訪者に提示するものであるということである。

序章において著者は、細分化された特定の読者層を念頭に置き、ごく限られたオーディエンスに説得的であれば十分な書籍や総合雑誌などのメディアと政治的立場や年齢、知識量の差異を超えた様々な層の観光者が訪れる戦跡とでは、必然的に戦争の語り方に相違が生じていたのではないだろうかかと問題を提起する。本書によって提起される問題は多岐にわたるが、本稿では、ひとまずこの問題提起に焦点をあてて、その議論の推移を見ることがしたい。続く各章で、それぞれの戦跡が何を伝えるべきものとして構想され、戦跡をめぐっていかなる議論が繰り広げられてきたのかということ著者は書いていく。広島、沖縄、そして知覧——各地域での詳細な「戦跡の戦後史」の検討を経て、終章の第四節「戦跡というメディア」では、知覧において戦友会・知覧高女などしこ会による特攻隊員の殉国賛美とそれに対するノンフィクション作家高木俊朗の批判が見られる状況を示した上で、両者のスタンスの相違がそれ以上突き詰められることはなかったと述べている。また、沖縄戦跡の例をひいて、巡拝記念誌や慰霊碑建立記念誌に見られる『英霊』

を「護国の御盾」として称揚するだけの論理」と、「責任追及や軍国主義批判を展開する論理」は、本来ぶつかり合ってもおかしくはないものだが、遺族団や観光団の間で論争が生じることは稀であったとし、「こうした相矛盾する思考が並存してはいたが、それはあくまで並存にとどまり、意見のぶつかり合いから思考が練り上げられることはなかった。むしろ、それらが相対立することも意識化されなかったがゆえに、記念誌に並存できたのではないだろうか」と述べ、「戦跡」というメディアは多様な思考や情念を突き詰めることなく、並存の状態に留め置くものであった」と指摘している。さらに、戦争をめぐる議論において「英霊顕彰」と「戦争責任追及」が相容れることなく二項対立の膠着に陥っていると昨今の言説状況をまとめつつ、議論の並存を許容する「戦跡」にその二項対立を抜ける回路を見ようとする。

以降では、著者の言う「英霊顕彰」と「戦争責任追及」が相容れることなく二項対立の膠着に陥っているとされる状況、そして、議論の並存を許容することで思考停止をもたらすという戦跡というメディアの戦争の語り方の特徴について、考えてみたい。

前者について、知覧や沖縄の戦跡をめぐって、殉国の英霊を顕彰する行為と戦争被害をもたらした責任の追及や軍国主義批判をめぐる議論が並存しているということは、理解できた。しかし、この見解は戦跡全体をめぐる状況として敷衍されているものの、ここに広島の場合は挙げられていない。このような状況は、広島平和記念公園においても同様なのだろうか。

もちろん、広島平和記念公園においても、原爆死者を顕彰する行為と戦争責任を追及する行為の双方を見ることができ、死者を

顕彰する行為には、取り分けそれが国家に結びつくものも存在する。例えば、原爆ドームの横に位置する動員学徒慰霊塔の碑文には、「明眸星雲を望み将来空高く羽ばたこうとした夢も空しく祖国に殉じたこれら学徒の霊を慰めよう」と有志同朋の手によつてうち建てた」と、その建立の由来が記されている。塔を建立した広島県動員学徒等犠牲者の会は、動員学徒犠牲者の国家補償を求め、叙勲や靖国神社への合祀も含めて国への陳情を展開してきた¹⁾。広島平和記念資料館には、複数の勲八等瑞宝章²⁾が遺品として収蔵されているが、これは同会の活動の成果でもあり、遺族が叙勲に原爆死の意味を見出した結果でもある。

一方で、著者の分類に沿えば「戦争責任追及」にあたると思われる慰霊碑もある。資料館近くに位置する「全損保の碑」の碑文は、「なぜ あの日はあつた なぜ いまもつづく 忘れまい あのにくしみを この誓いを」と、原爆被害に対する疑問と怒りをストレートに訴えている。この他にも、数ある公園内の慰霊碑や記念碑は、様々な語りを訪れる者に投げかけてきた。

このように広島平和記念公園には、慰霊碑だけを見ても複数の語りが存在し、中には、殉国の死を顕彰する語りも見られるが、著者の意図するように、原爆ドームを含む平和記念公園全体を「戦跡」と捉え、それが何を伝えるべきものとして構想されたかを問うならば、現在における戦跡全体の支配的な語りは、原爆ドームと平和大通りを一直線に結ぶ軸線上に置くという丹下健三の構想の中で建立され、原爆死没者名簿を納めて死者の慰霊の場の中心となっている原爆死没者慰霊碑（広島平和都市記念碑）前の碑文、「安らかに眠つて下さい 過ちは繰返しませぬから」ではないだろうか。

戦争に起因する理不尽な暴力によつて、肉親を失った当事者にとつて、大切な人の無意味な死を受け入れることは難しい。その中で、広島においても、殉国の死に意味を見出す死者を顕彰する語りは一定の役割を果たしてきたと言える。しかしながら、前記碑文は、殉国の英霊を顕彰することによつてではなく、過ちを繰り返さない、すなわち再び原爆の惨禍を繰り返さないということによつて、原爆死に意味を見いだそうとしている。これは、著者の言う「英霊顕彰」とは別のロジックであると考えられる。

広島平和記念公園一帯を戦跡と捉えて「英霊顕彰」について言及をするならば、原爆ドームや平和記念資料館あるいは原爆死没者供養塔の分析だけではなく、動員学徒慰霊塔への言及も必要と考えるが、本書に同塔への言及はない。それはにおいても、戦争、そして戦跡をめぐる言説の状況を、「英霊顕彰」と「戦争責任追及」の二つの立場の膠着状況とのみ捉えるのは、単純な整理のように思われる。そもそも、著者も序章で述べているように、特定の地域の変容過程でもつて、戦後日本の戦跡全体を普遍化して語ることは可能なだろうか。可能だとすれば、著者の想定する「戦跡」とは、何なのか。そういう意味で、「戦跡」という概念の明確な定義も読者として知りたいところである。

後者について、著者は次のように見解を述べている。

その意味で、戦跡は、戦争をめぐる思考を突き詰めるものではなく、むしろ、思考を一定の線で押しとどめてしまうものであった。戦跡がときに固有性を喪失し、地域の体験の範囲を軽く超える包括性やあいまいさを帯びるのも、そのゆえ

である。戦跡は、戦争についての思考を促すものではあっただろうが、同時に一定以上の思考の抑制をも誘うものであったのである。(二五〇頁)

筆者は以前、広島平和記念資料館に勤めていたが、とある日、公園の周辺を街宣車を取り囲んだことがあった。どこから車が集結したのか、見渡す限り、百メートル道路に日の丸を掲げた車列が連なっている。その拡声器から放たれる言葉は、「学徒たちの被害を胸に刻み……」という論調で、決して、平和記念公園や平和記念資料館に批判的なものではなかった。また、八月六日近くには、原水爆禁止国民平和大行進に参加する人々が、全国各地から所属団体の幟を立てて、核兵器の全面禁止や原発ゼロ、憲法九条を守り活かそう！などをスローガンに、続々と公園に集結する。

確かに、様々な政治的立場の人々が、それぞれの主張を象徴する場として平和記念公園に集う状況は、著者の指摘するように、「同床異夢が成立するところに、議論の並存を許容する戦跡の特性」なのかもしれない。しかし、それは「思考を一定の線で押しとどめてしまう」のではなく、そこから戦争のシンボルである戦跡を媒介として、それぞれの思考をさらに展開しているとも考えられる。

本書でも取り上げられている原爆死没者慰霊碑の碑文論争をはじめとして、広島平和記念公園に設置される碑や展示については、多くの議論がなされてきた。一九七〇年に建立された「韓国人原爆犠牲者慰霊碑」の設置場所の是非をめぐる差別ではないかという批判。一九八七年に元安川河岸に建立された中曽根康弘元総理が詠んだ

『「平和の祈り」句碑』に対する、当人の政治姿勢に批判的な人々による反対運動。二〇〇一〜二年にかけては、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館の展示説明に「植民地支配」や「国策の誤り」に関する言及をするか否かについて、設置者である厚生労働省と被爆者団体の間で激しい応酬があった。

こうした議論の中で戦跡は、むしろ、様々な戦争の記憶をめぐる議論を喚起し、対立を先鋭化する場にもなってきたと言えるのではないだろうか。本書は、これまで戦争の記憶を表象する手段として研究の対象となってきた博物館、遺品、慰霊碑、記念碑、遺構などの媒体に加え、これらを包含する「戦跡」も、戦争の記憶を辿る手段となりうることを提示したという意味で、興味深い。しかしながら、本書が示す議論の並存を許容するという戦跡の特性は、思考停止をもたらすのではなく、戦跡に集う多様な人々の議論を喚起し、複数の戦争をめぐる語りがせめぎ合う場を提供しているのではないかと考える。「戦跡」という場で、戦争をめぐる様々な語りが時に対立しながら、せめぎ合いつつ、変容の機を待っている。その「戦跡」の動的な姿の中に、著者の言う議論の対立を抜け出す回路を見出すことができるのかもしれない。

注

- 1 広島県動員学徒等犠牲者の会、一九七五、『戦後三十年の歩み』。
- 2 昭和四〇年代に、動員学徒の犠牲者遺族に授与されたもの。

(二〇一五年八月一九日 岩波書店 二九六頁 二五〇〇円＋税)